

キャラクター名  
 朱皇 紅瑠璃 (すおう くるり)

プレイヤー名

シンドローム	モルフェウス サラマンダー	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	高校生
オプション		年齢	17	性別	女
覚醒	命令	衝動	飢餓	初期侵食率	29 %
出自	資産家	経験	大失敗	邂逅	自身 (敷島 あやめ)

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	29
肉体	3	1	0			4	行動値	5
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	5
精神	1	0	0			1	戦闘移動	10
社会	2	0	0			2	全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			RC	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:	UGN	1
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
インフィニティウエポン (単体)	白兵	4r+1	3	LV+12		"錬金術師"反映済 EAP81
" 100%	白兵	8r+1		23		(加護前提)CR+咎 8
(範囲(選択))	白兵	12r+1		29		
	白兵	8r+1		23		(加護前提)CR+咎+ガード 9

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	

合計装甲: 0    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
錬金術師 "アルケミスト"	P	N		
霧谷 雄吾	P 信頼	N 不安		
両親	P 幸福感	N 恐怖		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6    残り財産P: 4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
CR:モルフェウス 3	2	2	Xジャー	-	-	-	-	
効果: 組み合わせた判定のC値-LV EAP129								
インフィニティウエポン 5	5	5	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: シーン中武器を装備 EAP81								
咎人の剣 3	2	6	Xジャー	-	-	対決	リミット	
効果: 攻+[LV*5] EAP86								
ギガンティックモード 1	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 範囲(選択)に変更 判定後武器破壊 EAP82								
砂の加護 3	3	3	オート	視界	単体	自動	-	
効果: 判定ゲイス+[LV+1]個 EAP83								
氷の回廊 5	1	1	マイナー	武器	範囲(選択)	対決	-	
効果: 飛行状態で戦闘移動 距離+[LV*2] EAP106								
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

◇成長案  
 ・砂塵霊(《加護》リミット/係数4攻撃力上昇/BC)

最近能力に目覚めたばかりの高校2年生。現在はUGNチルドレンとして日々任務をこなしている。名家の一人娘のため物腰柔らかな性格。誰にでも丁寧に接する。モルフェウス×サラマンダーのクロスブリードで、氷で鎌を生成し戦う。サラマンダーの能力はどちらかというと氷を使う方が得意で炎はあまり扱わない。ある日交通事故に巻き込まれそうになっている少女を助けたところ自分が車に撥ねられる。即死かと思われたが、彼女の命はレネゲイドウィルスによって救われた。能力に目覚めた当初は自身の身体の変化に心が追いつかず拒絶していたが、現在ではこの能力が自我のなかった自分に初めて人生における選択を提示してくれたものであると考え、それを使って人の役に立てるのなら迷わず行使しようと決意している。

◇その他  
 ・武器データ  
 種別: 白兵 技能: 〈白兵〉 命中: 0 攻撃力: +[LV+7]+5 (Dロイス分) ガード値: 3 射程: 至近

◇概要  
 名家の一人娘で、物心つく前からエリート街道を進むことを強いられていた。しかし初めの分岐点になる幼稚園の受験で失敗してしまい、それ以降母親には完全に見捨てられている。父親はごく普通に接しているが、それが偽りのものであるのではないかと、いつか母親のようになってしまわないかと内心不安に思っている。